opusdei.org

属人区長の書簡 (2012年8月)

オプス・デイ属人区長は、 「聖母は私たちにとって振舞 い方の模範であられる」と書 簡において述べている。聖母 の被昇天の祭日が、今月の考 察の中心である。

2012/08/09

愛する皆さん、イエスが私の娘たち と息子たちをお守りくださいますよ うに!

教会が8月15日に祝う聖母の被昇天 の祭日は、今月、私たちの心と視線 を惹きつけます。神によって肉体と 霊魂ともども天の栄光に上げられた 聖母の美しさを観想するとき、この 上もない崇高なそのお姿に、子供と しての私たちの愛はいやが上にも高 まります。そして、自分の惨めさや 卑小さが思い起こされ、教会と共 に、da manum lapsis, fer opem cadúcis[i]落ちぶれた者を救い、移 ろいやすく限りある私たちをお助け 下さい、と嘆願します。続いて、子 供としての感謝と共に、心を込めて その内容を黙想し、聖ホセマリアの ように繰り返します。「お母さん! 私たちのお母さん!私のお母さ ん! |

ミサの第一朗読は、聖ヨハネが描く 黙示録の次の場面を取り上げます。 「天にある神の神殿が開かれて、そ の神殿の中にある契約の箱が見え た。 (・・・) 天に大きなしるしが現れ た。一人の女が身に太陽をまとい、 月を足の下にし、頭には十二の星の 冠をかぶっていた。」[ii] ベネディ クト十六世は 一教皇様とそのご意向 のためにもっと祈りましょう― 聖書 のこの場面に触れて、尋ねておられ ます。「この箱にはどんな意味があ るのでしょうか。何が現れているの でしょうか。旧約聖書においては、 民の中における神の現存のシンボル です。しかし、シンボルはもう現実 となりました。新約聖書は、真の契 約の箱は一人の人間、おとめマリア であると語ります。神は人の作った 箱の中にお住まいになっているので はありません。神は人のうちに、そ の心のうちに住まわれます。マリア はそのご胎内に、人となられた永遠 の神の御子、私たちの主であり救い 主であるイエスをお宿しになったの です。| [iii]

旧約の民イスラエルに対する神の約 束は、その汚れなきご胎内でみこと

ばが人となられた聖母において、十 全に成就されました。神は、一つの 国とではなく、全人類と決定的で新 たな契約を結ばれました。シナイ山 においてではなく、みことばが私た ちと共にお住まいになるために人と なられたマリアの汚れなきご胎内に おいて、そうされたのです。聖母に 感謝しましょう。聖母は謙遜と従 順、その清さによって、神のご計画 を全面的に受け入れられたからで す。聖母の子供たち、つまり、あら ゆる時代の男女が、その模範に倣っ て、神の助けのもと、聖母において 輝いている諸徳を自分のものにする 努力を惜しまないよう、聖母に助け を願いましょう。

この祭日を機に、教皇様の教えに 従って、聖ホセマリアの模範に倣 い、この場面から読み取ることので きる事柄を、黙想し、実行するよう に勧めます。

ヘブライ人への手紙の著者は、旧約 の神殿で最も重要な場所であった至 聖所を思い起こしています。「そこ には金の香壇と、すっかり金で覆わ れた契約の箱とがあって、この中に は、マンナの入った金の壷、芽を出 したアロンの杖、契約の石板があ る。」[iv] マリアの象徴であるこの 箱の様子を詳しく見てみましょう。 神殿のもっとも聖なる場所に置かれ ていたということが、聖母が特別に 神の近くにおられ、神と緊密に結ば れていたことを私たちに物語りま す。「御身にまさるのは、ただ神お ひとり」[v]と、聖ホセマリアと一致 し、やむにやまれない必要性にから れ、喜びの叫びをあげましょう。神 がモーセにお与えになった十戒の石 板は、民が約束を守っている限り、 契約を守ることが神のみ旨であるこ とを示していました。聖書は、主の あらゆる配慮にもかかわらず、イス ラエルがしばしば不忠実であったと 記しています。しかし聖母はそうで

はありません。教皇様は強調されます。「マリアは契約の櫃です。イスをその胎内に迎え入れられたから。神のご意志であり、神の真れをである生きたみことばを、受け入血をおいることによって、新しい永らです。その体と血であって、その体と血であって、その体と血であって、その体と血であってす。」[vi]

の望みが本物であることのしるしです。聖ホセマリアの聖霊に対する祈りの文句が思い起こされるではありませんか。「御身がお望みのことを、お望みのゆえに、お望みのように、お望みのときに…、私も望みます。」[vii]

また別の言い方で、忠実であることへの同じ決意を強調されています。「『イエスが愛された』若い使徒みれたのことを考えて、聖なる嫉みないあられたことがあるだろう。あなれたとがあるだろう。と呼ばれたら嬉しいのではないだろうか。そうなれるよう、毎日手段を講じなさい。」[viii]

この望みは、私たちが一日中、きっぱりとした態度で、まず些細なことから始めて、あらゆる出来事において主との一致を求めるなら、現実のものになるでしょう。創立者が言っていました。「愛する人にとって重

要でない振舞いは一つもありませ ん。愛が私たちの振る舞いを偉大な ものにしてくれるので、最も小さな ことさえ、英雄的なものにすること ができるのです。絶えず小さな犠牲 を捧げるというこの忠実さは、どれ ほど神に喜ばれることでしょう。ど れほど意志を変えてくれることで しょう。どれほどあなたの心を広く してくれることでしょう。あなたの この小さな義務への忠実さによっ て、人々の生活をより快適なものに するために、どれほど貢献すること でしょう。」[ix]

聖母はいつもこのように振舞われました。お告げのとき、そして十字架のもとで御子の苦しみと死を目のといっておられたときにそれが際立っています。ご生涯の他の様々を付けて神のみ旨を愛されました。すりして神のみ旨を愛されました。すりで家庭で家事にいそしまれたとき、聖母の助言や慰めを求めて訪ね

てくる人たちを親切に迎えられたとき、イエスや親戚の人たちと様々なことを話し合われたときなど、のでも神のみ旨を愛しておられたのです。そのようなときにも、聖霊の働きかけに全面的に応え、それにマースをもれていた恩恵の充満は、たられていたのです。絶えず増していっていたのです。

契約の櫃には、十戒の石板のほか に、民が荒れ野をさまよっていたと き神が食物としてお与えになったマ ンナのかけらも入っていました。こ の食物は、イエスご自身が、カファ ルナウムでのいのちのパンについて の話の中で説明しておられるように [x]、秘跡のベールの下に現存するキ リストの真の御体と御血である聖体 の前表です。主を礼拝し、糧を得る ため、この偉大な宝をご聖櫃に安置 しています。主は、永遠の住処を目 指して歩む私たちのために新たなマ ンナとなられたのです。

聖母は私たちにとって振舞い方の模 節であられることに注目しましょ う。この世で聖母以上にイエスと細 やかに愛情深く付き合った人がいる でしょうか。主の長い間の隠れたご 生活、そして公生活中に、聖母以上 に主と深く関わった人がいるでしょ うか。主が、ご自分のいけにえによ る比類なき賜を残して天に昇られた 後、使徒たちとその司祭職における 後継者たちの手によって秘跡的に現 存されるご聖体を、聖母以上に深い 信心を込めて拝領した人がいるで しょうか。真に、福者ヨハネ・パウ ロ二世が強調されたように、真にマ リアは最も優れた「ご聖体によって 生かされた女性 | であったのです。

この祝日の典礼が示唆しているように、foederis arca 真の契約の櫃である聖マリアを観想して学び得る、別の教えを掘り下げて考えてください。みことばとご聖体において、聖書の読書と黙想において、ミサ聖祭

8月15日の祭日は、オプス・デイにおける聖母の子供たちに、1951年の同じ日付を思い起こさせます。その日、聖ホセマリアは、神がお許しになった超自然的な不安に促されて、ロレトの聖なる家に赴き、汚れなき甘美なマリアのみ心にオプス・デイを奉献されたのでした。

創立者は度々、聖母の母としての細 やかな配慮が特別にはっきりと表さ れた、あのときの状況について話さ れました。中でも、祭壇の上方に刻 まれていたhic Verbum caro factum est ここでみことばは人となられ た、という言葉に深い印象を受けた こと、そして、心にこの言葉を刻む と同時に、神が願いを聞き入れてく ださったと確信したことを、思い返 しておられました。後年、このこと をはっきりと述べておられます。 「私たちが住んでいるこの地球の一 隅の、人の手に成るこの家に、神は お住まいになったのです。(・・・)あ のときの感動は今も続いており、ロ レトに戻ってみたいと思っていま す。『ここにおいてみことばは人と なり給えり』と繰り返し唱え、ゆっ くりと考え、イエスの幼年時代を想 い起こすために行ってみたいので

いつも聖母への深い信心を持っておられましたが、あの時からそれはさらに深まり、帰天されるときまでさらに発展して行ったと考えられるで

す。| [xii]

しょう。ここで、創立者が聖霊に導かれて聖母への信心をより深められた、別の姿を思い起こしてもらいたいと思います。それは、当時は22日に祝われていたマリアの汚れなきみ心の祝日の翌日、1971年8月23日に、創立者が心の奥深くで聞かれた言葉です。 Adeámus cum fidúcia ad Thronum glóriae, ut misericórdiam consequámur 憐れみを受けるため、大胆に栄光の座に近づこうではありませんか。

創立者はそのとき、イタリア北部のある場所で休養しつつ、働いておス・動いておました。教皇様、オプスに対した。教会と教皇様、オプになの大が天に立ち側立ちの祈りが天に立ち見に次の前に打ち明けられました。「は見たではしませんでした。しかし、今はお願いました。しかし、今はお願い

しなければならないと思っています。『求めなさい。そうすれば与えられる。探しなさい。そうすれば可力かる。門をたたきなさい。それば開かれる』(マタイ7,7)という主のみ言葉の全面的な意味がよければなったいと確信しています。限りを託したいと思います。」[xiii]

数週間後の1970年8月6日、主は、祈り続けるようにと促し、この考えを確信させてくださいました。預言をイザヤの言葉[xiv]をこだまさせるかのように、Clama, ne cesses! 叫っている。と変が聖ホーをです。と変がです。では、黙すなに響きですがです。では、との神の勧めを聞いた後、コッパやアメリカのさまががました。先ほど述べたように、1971年8月23日、祈りが聞き入れられた。マリアにより頼むことが必

要であったし、また必要であること を、神は確信させてくださったので す。

その同じ日に、いつもそうしていた

ように、ドン・アルバロと私に打ち 明けられました。「今朝、朝食の 時、主はこの言葉を思い起こさせて くださいました。これは、汚れなき 聖マリアのみ心の祝日に立ち昇った 全員の叫びに対する答だと思いま す。皆熱心に祈ったはずですから。 主の御憐れみにより頼みつつお願い しなければなりません。正義に基づ いてお願いすることはできないので す。もし神の正義を垣間見ることが できたなら、打ちのめされてしま い、頭をもたげることさえできない でしょう。無限に完全なお方ですか ら。御憐れみとその愛によりすがら なければなりません。哀れな人間の 心は、すぐに権利があるかのような 頼み方をしてしまいますが、私たち には権利などないのです。しかし、

マリアの取次ぎによって主の一瞥を勝ち取ることができます。神は限りなく憐れみ深いお方で、子供たちを、しかも御母を通してお願いする子供たちを見放すことなどおできにならないからです。」[xv]

創立者の打ち明け話を皆さんに伝え るのは、皆がこれを自分のものにす るようにと望むからです。お気づき のように、祈りについてばかり話し ました。祈りこそが、教会と教皇 様、オプス・デイと人々、そして私 たち一人ひとりに必要な恩恵を確実 に頂くための手段だからです。朝 夕、単にでき得る限りよい念祷をす るよう努めるだけでなく、数多くの 意向のために信仰をもって、謙遜 に、忍耐強く祈り、いつも平和で喜 びに満ちていましょう。私たちは神 の子であり、聖マリアの子供ですか ら、常に勝利者なのです。

先月の11日、皆と共にファチマの capelinha(小聖堂)を訪問すること ができました。私たちは、皆さんの さまざまな意向に固く一致して、教 会のため、教皇様とその協力者の 方々のため、オプス・デイと全人類 のために祈りました。そして、創立 者が「避難所」と言って訪問してお られたことを、自然に思い出しまし た。創立者は、当時と将来の娘や息 子たち一人ひとりに寄り添うために そうしておられたのです。聖母と一 緒にいるのは何と素晴らしいことで しょう。

この8月の間も、私にはしなければならないことがたくさんあります。皆さんの絶え間ない一致で、私の仕事が進むよう助けてください。創立者が、1931年8月7日のミサ中に聖なるホスティアを掲げた際に関して書かれたことを、再読し黙想するよう勧めます[xvi]。人間の諸活動の頂点にキリストを据えなければならない

男女の中に、私の娘と息子、あなたがいるのですから。それをあなたがどのように遂行しているかじっくり見つめてください。

心からの愛を込めて祝福を送ります。

皆さんのパドレ

†ハビエル

パンプローナ、2012年8月1日

[i] 聖母の被昇天の祭日、前晩の典礼。

[ii] ローマ・ミサ典礼書、聖母の被昇天の祭日、第一朗読(黙示録 11,19-12,1)。

[iii] ベネディクト十六世、2011年8 月15日、聖母の被昇天の祭日の説 教。

[iv] ヘブライ9,4。

- [v] 聖ホセマリア、『道』496。
- [vi] ベネディクト十六世、2011年8 月15日、聖母の被昇天の祭日の説 教。

<u>[vii]</u> 聖ホセマリア、1934年4月、手書きのメモ。

[viii] 聖ホセマリア、『鍛』422。

<u>[ix]</u> 聖ホセマリア、1945年、説教の メモ。

[x] ヨハネ6,26-59参照。

[xi] 聖ホセマリア、『道』87。

[xii] 聖ホセマリア、『知識の香』12-13番。

[xiii] 聖ホセマリア、1970年4月14日、ファチマ巡礼のメモ。

[xiv] イザヤ58,1(ヴルガタ訳)参 照。 [xv] ハビエル・エチェバリーア、 『聖ホセマリアの思い出』95ページ (邦訳版)。

[xvi] 聖ホセマリア、1931年8月7日、『内的覚え書き』217。(A.バスケス・デ・プラダ著『オプス・デイの創立者』第一巻380-381頁:邦訳版未刊)参照。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/shuren-qu-chang-noshujian-2012nian-8yue/ (2025/12/16)